



Chobi visiting the Sakuhana family, who had originally rescued him, at the Japan Sea.
チョコビと咲花ファミリー（助けてくれた恩人家族）、日本海の町で再会

1990年、但馬の山野に、うららかな陽ざしがふりそそぎ、若葉が芽吹き始める頃です。兵庫県城崎郡香住町土生、土生峠の一本道を登りきったところに、ドライバー達の休憩場所がありました。道路沿いにスペースがとられ、ベンチが二つ並んでいます。ベンチの後ろには、アジサイが十株ほど植えられていて、垣根のように若葉をのばして、藪のような茂みを作っていました。そのアジサイの茂みが、捨て犬チョコビの隠れ家だったのです。ベンチの横に置かれたゴミカゴから、ドライバー達の残飯を見つけては、飢えをしのいでいたようです。

通勤路の帰り道、何気なくそこでひと息いれようとした主人が、アジサイの茂みにチラチラ動く、茶色の動物らしきものに目をとめたことが出会いでした。

「あれっ！キツネだろうか？」チョコビの第一印象です。その動物は主人が近づいて来て、ベンチのすぐ前にしゃがみこんだので、コソコソと茂みの中に尻込みして隠れようとしてしました。でも何もせずただジッと自分を見つめている人間に、モジモジしていました。

「キツネじゃない。犬だ。」と気づいた主人が、愛着を込めて片手を差し伸べたところ、犬は、スッとアジサイの茂みの中にもぐり込んで、犬は主人の手が届かない藪の奥へと、ひっこんでしまったのです。

それからの朝夕、峠を通る主人は、ベンチの後ろに犬の姿を探すようになりました。犬は人目を避けているような暮らしぶり、姿が見えない時もあり、人が見つけて近づくと、

もうアジサイの陰に隠れてしまいます。茂みの根本に、ドッグフードの入った皿を置いていくことが続きました。私達の毎日の話題は、その犬に始まり、その犬で終わりました。

そんな日々が、一週間ほど過ぎたでしょうか。ハッキリ姿を見せない犬が首輪をしていて、それもありきつそう、ということに気がついた時、先々にある心配事より、先ず犬を保護することが大切と、私達は思い切りました。夕方になってから、チョコビを迎えに、峠に出かけました。ベンチの下で、前足にアゴをのせて、目を瞑っていたチョコビは、私達が近づくと、案の定、藪の中にその姿勢のまま、ズルズルと後退して行こうとします。「いい子、いい子」と声をかけながら、チョコビの前足付け根のあたりをつかまえて、ゆっくりベンチの下から出てきてもらいました。「キツネに間違われたにせは、随分と大きな体格ねえ。」チョコビの全身を初めて見た時、思わず出た言葉です。

チョコビは、赤い皮の首輪をしていました。首輪をつけたまま捨てられてから、彼は成長し続けた為に、もう指を入れる余裕もない程に、首輪は彼の喉元を締め付けていました。皮膚に食い込んでいなかったのが、不幸中の何よりの幸いでした。ちょっと触れただけで、それまでおとなしかったチョコビが、低いうなり声をあげます。そんなチョコビをなだめ、なだめ、やっとのことで首輪がはずれた時には、これから先の私達の心配事全てが解決してしまったと錯覚する程に、ホッとしてしまいました。翌日、獣医さんの健康診断の結果、まだ乳歯が残っているので推定一歳前後、栄養状態が悪く、四肢もヒョロヒョロとしています。病気はなく、診察の間もおとなしく我慢できる、良い性格をもっていることも判りました。わが家の犬達、ころ太とポテトともすぐに馴染む素直な性格です。散歩に行く時には、一番体が大きくても幼いチョコビが、二頭の後ろをヒョコヒョコ楽しそうに、リードなしでついて歩きました。雑草がそよいでいる草野球のグラウンドに、じゃれあいながら一緒に遊んだ、楽しい思い出、ふと見せるチョコビの遠くを見るようなまなざしが、今も心に残っています。

オリバー先生は、私達の心配事、チョコビを引き取ることが出来ない事情をわかって下さり、チョコビはアークの子になりました。その後のチョコビの活躍は、改めて言うまでもあり

ません。オリバー先生の家族となり、アークを代表する犬に成長したのです。ニュースレターに、「チョコビ先生」としてコラムをもつようになった程です。

1994年、チョコビは、アークの代表として、香住町にお里帰りを果たしました。町の国際交流協会に招待されて、オリバー先生と一緒に、動物愛護の講演会の壇上に立ったのです。香住町に着いたチョコビは、大勢の人々、子供達の大歓迎を受け、ブーケを首に飾ってもらいました。そして、終始落ち着いた立派な態度で、代表の役目を果たしたのでした。

「チョコビチョコビ」とは、少しずつ、ちよとずつという但馬の言葉です。

遠慮がちに少しずつ、普通の子なら一歩で行くところを二歩、三歩とチョコビチョコビ進む、一口で食べるものを二口、三口でチョコビチョコビ食べる、「チョコビ」という名前は、保護して間もない頃の、彼のそんな仕草が所以です。

アークで暮らすようになって、名前は変わることがありませんでしたが、チョコビは、オリバー先生と巡り会えたことで、秘められていた素晴らしい性質をのびのびと開花させてもらい、幸せにその生涯を終えることが出来ました。

チョコビが悲しい隠れ家にしていたアジサイは、「七変化」ともよばれ、花言葉は「移り気」です。チョコビはアークで広報マネージャー、司令塔、先生、親善大使、そしてマスコット等、アジサイのような「七変化」の変身をして活躍し、「移り気」でなくその一生を通して、人と信頼を保ち続けました。

たとえどんな事情があつたにせよ、私達を信じて身をまかせ、ついてきてくれたチョコビを保護しただけで、一緒に暮らせなかったという自責の念を、私達はずっと心に抱き続けていました。しかし、アークでみんなに、そしてオリバー先生に愛され見守られた、チョコビの暮らしと活躍を知るにつれて、そんな思いは彼の幸せを喜ぶ気持ちに変わっていききました。チョコビが、本当の幸福の中にいることがわかったからです。

アジサイの若芽が伸び、その若葉の美しい季節が巡って来るたびに、私達はチョコビに思いをはせるでしょう。これからも、ずっと。

オリバー先生、ありがとうございました。

そして、チョコビ、ありがとう。

兵庫県豊岡市
咲花 篤子

